

火星



平成17年2月号

七曜抄 (二)

山尾玉藻

満月をきのふに書写の寒さかな

凧一号メタセコイアが真つ赤なり

バーベルの端たんぽぽの返り花

煤竹の渡り廊下をゆきにけり

鉢泉の匂ふロビーの鏡餅

足もとに蛸足配線湯冷めせる

寒見舞法然院に沿ひゐたり

漬けてある櫛に雪の二三片

竹馬の見下ろしゆける授乳かな

長靴の襦宜の通りし牡丹の芽

玉藻俳句鑑賞

ふかふかの座布団に鴨数へをり 玉藻

〔火星〕平成十六年一月号より

「ふかふかの座布団に」の措辞に旅亭の一室を想像。遠くシベリヤから来た鴨の群が湖に羽を休めているが鴨の蹠は一刻も動きを止めないのだ。そうした鴨と座布団の我との対照的な関わり方に詩精神を噴出！ご自分の存在意識の視線が、鴨の情景を引き寄せ自問自答。何かを解決される。鴨と人の姿が二重写しになって読者に深い印象を与える。（春月）



太白星

柳生千枝子

炊飯器歌ふ茸飯炊き上り
空は海航跡長く冬立つ日
芦刈れり列車鉄橋渡り了へ
面影のなほ生き生きと菊の白
小春日の匂ひ日なたの祖母の匂ひ
山小春独りは寂しまた愉し
初時雨空しさにやや馴れてきて

杉浦典子

空稲架に日の当たりをり波の音
骨貝のかたち冬に冬来てゐたり

冬はじめ竹林の土膨れをり
水湧いてをり綿虫につきゆけば
マーメイド号に触れきし風邪心地
冬風の百の帆柱揺れてゐる
枯蓮やたれにも会はぬ歩を早め

浜口高子

隠国の池澄みゐたり穴まどひ
急降下の鳥つぶてあり紅葉谿
焼畑の炎のちろちろと時雨くる
夫の鼾どこにもあらず冬銀河
灯を消して夜の向うの枯芒
山姥の杓に冬日がぶ飲みす
冬霧や占ひ館の革の椅子

火星作品

山尾玉藻選

日の差してかりんの落ちし水の音
西宮 米澤光子
缶蹴りの音聞いてゐる風邪寝かな
味噌汁の人参大根夫癒えよ
寒い木に雀集まる夕日かな
木枯を撮りに行くてふカメラマン
明石 戸栗末廣
猪罫やまつすすぐ走る山の水
水音のやすけさにあり 囀籠
万両に巡礼の杖休めあり
牛売られ綿虫とんとゐずなりぬ
梟のはらわたの色朱とおもふ
音高く箕を打ち返へす秋をさめ
姫路 松たかし
やまつみの耳聴くなる枯木山
囀籠 筵のものよき

洗面の音大寺の冬はじめ
立冬の空へ突き出す撞木かな
杉の香に噎せし一声冬の鶺鴒
煮凝や余震なかなか収まらず
一面の冬田の横の親子井
通夜酒の足となりたる冬田道
ビ―玉を陽に透かしぬるそぞろ寒
木菟や姑そつくりの夫のかほ
市長賞の十日の菊となりぬたり
闇汁のむかひの顔は知つてをり
短日や小豆入れある一升びん
狐火や男の足のぬくかりき
水の辺に日の衰へし障子貼
巫女のもつ風船あまた七五三
工事車の列なして来る冬の霧
わが伸びし影に驚く冬田道
どの辻にも違はずありし後の月

八幡丸山照子

大和郡山 城 孝子

八幡大山文子

選のあとに

山尾 玉藻

九日抄十五句に限っては毎月自信をもって推したいのであるが、今月はやや低調であった。冬季の場合は季語が少ない所為でもある。また夏の暑さに比べ冬の寒さの方が過ごし易い為でもある。五感で捉えることが必要な文芸にとつて致命的かも知れない。しかしこう言う時にこそ人よりちょっと力を入れれば、抜ける句が出来るものなのだ。

木枯を撮りに行くてふカメラマン 米澤 光子

めりはりの効いた句で一読してウンと納得させられる。しかし景は殆ど何も無い。ちよつと変つた構成力に魅力があるのだ。実際に作者がカメラマンから聞いた訳ではなく、あくまで作者の構成である。そこが優れている。

梟のはらわたの色朱とおもふ 戸栗 末廣

「梟」に対する感性での取合せの場合、「朱」とか「紅」などはよく合う。それを「はらわた」まで突っ込んだところにこの句の特長がある。止り木の「梟」の腹の辺りぼーっと灯りが点いているように思えてくる。夜や闇の句の発想は似たものになり易いが、掲句に類句性は無い。

一面の冬田の横の親子丼 大山 文字

掲句の「親子丼」は自宅ではなく、やはり食堂のそれである。こう言う情景を想像してみると「冬田」の中にある名刹が浮かんで来て、その門前にある食堂がよく似合う。うどんや蕎麦に比べ、掲句の場合はややこつてりとした「親子丼」が相応しい。無駄の無い省略の効いた句である。

巫女のもつ風船あまた七五三 丸山 照子

良い風景である。神社の周りが枯れ始めた中、緋袴の「巫女」が色とりどりの「風船」を持つているのだ。祈祷して貰つた子供達へのおまけのようなものであろう。蕭条とした中で色彩が非常に鮮やか。

金柑の実にもたれあはしじみ蝶 吉田 康子
夕映に虫動きをり花八つ手 廣畑 忠明

取合せの点で似た句である。「金柑の実」は葉が真つ青なだけに小さいが鮮やかに浮かぶ。「金柑」の色からして「しじみ蝶」も温かさを感じているのかも知れない。恍惚と「もたれあはし」のである。その措辞が好く、秀逸である。「金柑」に比べると「花八つ手」は色は地味で目立たない。ただ他の冬の花を想像する時、「花八つ手」の辺りは殊に温かい気がする。「夕映に」が生きているのも「花八つ手」故であらう。両句共、確かな写生によって成つた句。

恒星圈

吉田島江

播州を望む枯木の匂ひけり
律儀なる夫婦の大根襖かな
とむらひの矢印をゆく冬菜畑
一葉忌首を廻せば骨が鳴り
椿の葉の鋼光りや蕪村の忌

吉田康子

元田千重

茸山を競り落し来しゴム草履
夜学子の黒縁めがね正しけり
立冬やシートベルトのカチと鳴る
布巾真つ白朝のレモンを輪切りにす
牡蛎舟へ下る栈橋夕ざるる

炮烙の風呂の熱さの良夜かな
七五三松茸買うて帰りけり
枯蠟螂扁桃腺をわづらうて
十二月海豚と遊ぶ指の先
ときをりに足をさすりて冬至粥

山本耀子

米澤光子

川下り紅葉あかりの岩を突く
菩提樹の黄落止まず愛染堂
底冷や裳裾をかへす女身仏
鷄くる宝蔵の戸の半開き
笹鳴きの庭に広がる設計図

日の暮の耳びんとなる谿紅葉
でこの熱でこで測りぬ石露の花
杉の木に縄捲いてある目白かな
短日のおひる逆立ちする日差し
振返る首の鳴つたる冬の鴟